ユニテ

2014. 4

41

一般財団法人　ロマン・ロラン研究所

表紙　ヴィヴェーカーナンダ
1893年9月、シカゴでの「世界宗教会議」前後に撮られたもの
（撮影　トーマス・ハッソン）

〈他の弁士たちはおのおの自分の神について、自分の宗派の神について語った。彼は――彼だけは――彼ら万人の神々について語り、宇宙的存在の中に彼らを包含した。ラーマクリシュナの呼吸が偉大な弟子の口を通じて、もろもろの国境を吹き消したのだった。一瞬間にして、ピレネーの山々ももはや存在しなかった！宗教会議はこの青年雄弁家に熱烈な拍手喝采を送った〉
（ロマン・ロラン『ヴィヴェカーナンダの生涯と普遍的福音』、宮本正清訳より）

目　次

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ――彼の生涯とメッセージ　スワーミー・サティヤローカーナンダ……1
世界遺産ヴェズレー　ロマネスク芸術の宝庫　アンドレ・アンジェイ・グルシェフスキ……24
『魅せられたる魂』と音楽　読書会から　……清原章夫……29
ユニテフォーラム
聖地ヴェズレーから京都へ　……有馬通志子……40
田谷里美さんのこと　読書会の友を偲んで　……中田裕子……42
ロマン・ロラン研究所便り
研究所設立趣意書　……44
研究所の活動　……45

購入図書……52
寄贈図書、読書会報告、短信、訃報……53
二〇一三年度　賛助会員、寄付者名簿……55
編集後記……56

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ
――彼の生涯とメッセージ

スワーミー・サティヤローカーナンダ

この度は宮本正清先生が設立された著名なロマン・ロラン研究所に招待していただき、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生誕一五〇周年を記念してヴィヴェーカーナンダについて話す機会を与えて下さったことに、心より感謝します。

個人的な話になりますが、宮本先生が翻訳された、ロマン・ロラン『ラーマクリシュナの生涯』と『ヴィヴェカーナンダの生涯と普遍的福音』を読んで、私は彼らの教えに確信を持ち、将来を決めることができました。また宮本先生と奥様には、私がインドに出家するために旅立つ直前の一九七六年の二月にお家に招いていただいてご馳走にもなり、励ましの言葉を頂戴したことを覚えています。これも本当に深いご縁だと感じています。

さて、今日は、最初にスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯、次に彼のメッセージ、そして最後に彼の設立したラーマクリシュナ僧団の現在の活動状況についてお話したいと思います。

ヴィヴェーカーナンダの生涯

一九世紀に彗星の如く現れ、第一回世界宗教会議で一躍時代の寵児になり、宗教界だけでなく、文学、科学、哲学、政治、心理学など広い分野で多くの人々に影響を及ぼした人、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの影響は今なお強く、世界的に有名な歴史家A・L・バーシャム教授が言った次の言葉が、証明されつつあると思います。

> 来るべき数世紀、彼（ヴィヴェーカーナンダ）は現代世界の、特にアジアに関していうならば、主要な人物の一人となろう。そしてインドの宗教の全歴史の中で最も重要な人物の一人として記憶されるだろう。[1]

ヴィヴェーカーナンダはインドにおいて、マハトマ・ガンディー、タゴール、ネルーをはじめとする多くの指導者たちだけでなく、全国民に大きな影響を与えています。実際二、三年前に、若者を対象として、誰を彼らの理想と考えるかというアンケートをとったときにヴィヴェーカーナンダの名前が一番に上がりました。また彼の誕生日を記念して、インド政府は「若者の日」として毎年お祝いをしています。

西洋ではその当時のハーバード大学の教授たち、なかでも哲学者であり心理学者であったウィリアム・ジェームズの他、インド学者、歴史家、科学者、音楽家などに影響を与えています。また、後にロマン・ロラン、トルストイ、ニコス・カザンザキス、オルダス・ハックスレイ、さらにJ・D・サリンジャーなどの文学者に影響を与えています。現代でも彼の影響を受けている人々は少なくありません。

また、東南アジアの政治家、なかでもスカルノは、ヴィヴェーカーナンダの百年祭にインドネシアで彼のメッセージがインドネシア語に訳され出版されたときに、その序に次の言葉を書いています。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ！　何と言う名だ！　彼は私に多くのインスピレーションをくれた人々の一人だ――強くあれというインスピレーション、神の召使であれというインスピレーション、我が国の召使であれというインスピレーション、貧しき人々の召使であれというインスピレーション、そして人類の召使であれというインスピレーションである。

我々はもう十分長く泣いた、もう泣くのはやめよ、自立して男となれ、と言ったのは彼である。[2]

彼は毎晩ヴィヴェーカーナンダの本を読んで元気づけられたと言っています。

ロマン・ロランはヴィヴェーカーナンダの本を読んだときに熱狂したと言われています。これはインドの有名な宗教家シュリー・オーロビンドの弟子であり、歌手、詩人、小説家であったディリップ・クマール・ロイが、ロマン・ロランとスイスの彼の家で会ったときの会話からも分かります。

ロイ　ロランさん、あなたは海を隔てたこんな遠くにおられ、また英語もご存知でないのに、なぜ彼ら（ラーマクリシュナとヴィヴェーカーナンダ）についてこんなにも熱心になれるんですか？

ロラン　……あのような偉大な魂に対して、どうして熱狂せずにいられましょう。輝かしき力、光り輝く自尊心、否、人間の本来の神聖にたいする強い確信――それらには何の意味もないのでしょうか？　彼らは人類の財産です。彼らのインスピレーションの価値は決して過大評価することができません。[3]

この会話は、ラーマクリシュナとヴィヴェーカーナンダがロランに与えた印象がいかに大きなものであったか、またロランが彼らの偉大さをどれほど深く理解していたかを示す証しでもあります。

ヴィヴェーカーナンダは一八六三年一月一二日、カルカッタ、現在のコルカタの裕福で有名な高等裁判所の弁護士の家に生まれました。幼少の名前はナレ＝ドラナートでした。お父さんのビシュワナート・ダッタは慈善家で、とても自由な考えの持ち主で、英文学、ペルシャ文学に通じており、聖書やハフィーズの詩をよく朗誦して友達にもてなし、イスラム教の文化にも特に興味を持っていました。お母さんのブバネシュワリーデービーは伝統的なヒンドゥ教の女性で、大家族の女主人として、物静かで品位のある態度で多くの家事を処理し、貧乏な人々の世話も良くし、人々から尊敬されていました。彼女はラーマーヤナやマハーバーラタなどのインドの歴史的神話を特に好んでいました。祖父もヴィヴェーカーナンダの父が生まれた後に出家し、僧侶になっています。

子供時代のヴィヴェーカーナンダにも色々興味深い話はありますが、今日は彼が神について興味を抱いた大学生の頃の話から始めましょう。

彼は神について知ろうと真剣に考え、単に神の存在を信じる、あるいは確信するというだけでは満足せず、神は実在し神を見た人がいるはずであると思い、神を本当に見た人を探します。そこで、当時の有名な宗教家に会いに行きますが、神を見たと言う人には出会えませんでした。会った人々の中には、ラビンドラナート・タゴールの父であったデベンドラナート・タゴールもいました。彼はマハリシ、偉大な聖者、と呼ばれていましたが、彼もヴィヴェーカーナンダの質問にちゃんと答えることができず、「君はヨーギーの目を持っている、瞑想をしなさい」とだけ答えたそうです。

当時、後のヴィヴェーカーナンダの霊性の師となったシュリー・ラーマクリシュナは、デベンドラナート・タゴールと同様に有名であったケーシャブ・チャンドラ・セーンによって彼の新聞で紹介され、一般に名が知られるようになっていました。シュリー・ラーマクリシュナはカルカッタ郊外のダクシネシュワルのカーリー女神を祀るお寺の祭司でしたが、インドの歴史の中でも最も代表的な聖者と考えられ、自ら神を体験し、それに基づいて、万教帰一の教

えと、神を中心とした生活、そして神の体験の重要性を強調しました。

ヴィヴェーカーナンダがラーマクリシュナの名前をはじめて聞いたのは、彼の大学の校長であり英文学教授であったウィリアム・ヘースティ氏が、ワーズワースの「遠足」という詩について語っていた講義のときでした。ヘースティ教授がその詩に出てくる「Trance（恍惚）」について、「宗教的恍惚はすごく稀な現象で、近年において特にそうである。私はこの祝福された状態を達成した人をたった一人だけしか知らない。それはダクシネシュワルのシュリー・ラーマクリシュナだ」と言ったのです。

また、ヴィヴェーカーナンダは親戚のラームチャンドラ・ダッタからも、「もし君が本当に神について知りたいのなら、シュリー・ラーマクリシュナを訪れるがよい」と言われていました。

二人の最初の出会いはシュリー・ラーマクリシュナの信者の家でした。ヴィヴェーカーナンダは神の賛歌を歌うためにそこに招かれていました。そのとき、シュリー・ラーマクリシュナはヴィヴェーカーナンダの真剣な態度と神への愛に深く心をうたれ、ダクシネシュワルに尋ねてくるように彼に言ったのです。

そしてある日、数人の友達と一緒にヴィヴェーカーナンダはシュリー・ラーマクリシュナに会いに行きます。シュリー・ラーマクリシュナは彼に神の歌を歌うように頼みます。彼は歌いました。するとシュリー・ラーマクリシュナは立ち上がって、彼を部屋の外のベランダに連れて行き、戸を閉め、彼の手をとり、泣きながら言ったのです。「あなたはなぜ早く私に会いに来てくれなかったのですか。なぜ私をこんなに長い間待たせたのですか。あなたに本当に多くのことを話したかったのです。世俗的な人と話すと私の耳は燃えるように痛むのです。あなたは主ナーラーヤナの化身でこの世の不幸を除くために生まれたのです」。ヴィヴェーカーナンダはこの言葉を聴いてとても驚き、シュリー・ラーマクリシュナの正常さを疑うのですが、部屋に戻ると、シュリー・ラーマクリシュナは普通の人のように振る舞い、特に彼の神への愛の深さ、心の清らかさ、そして完全な放下の心に打たれるのでした。シュリー・ラーマ

クリシュナはヴィヴェーカーナンダにまた来るように強く約束させます。彼はカルカッタに帰りますが、その後シュリー・ラーマクリシュナを度々訪れ、彼の弟子になりました。しかし二人の関係は少し変わった師と弟子の関係でした。なぜかと言うと、シュリー・ラーマクリシュナが言った多くのことをヴィヴェーカーナンダはすぐには受け入れなかったからです。

シュリー・ラーマクリシュナは、数々の宗教の修行をし、神を悟った聖者でした。ヴィヴェーカーナンダや他の弟子たちが彼のもとに来はじめた頃は、常に神の意識で恍惚に浸っている状態でした。彼のこの状態は普通の修行者のように努力して三昧に入り、恍惚を経験するというのではなく、神に関することを耳にしたり、あるいは神の歌を歌ったり、あるいは神の歌を聴いたり、あるいは神の絵や像をみたり、あるいは神を思い出させるものを見るだけでも、恍惚の状態に入っていったのです。この様子は「シュリー・ラーマクリシュナの福音」に描写されています。彼は常に神と話し、神の命令するままに生きていたのです。

マハトマ・ガンディーはシュリー・ラーマクリシュナについて次のように言っています。「シュリー・ラーマクリシュナの話は宗教の実践の話である。彼の生涯は、私たちに、神と対面することを可能にする。神のみが実在し全ては幻想であると確信することなしに、誰も彼の生涯を読むことはできない。ラーマクリシュナは生きている神聖さの体現者である。[4]」

恍惚にも色々な段階があり、その最高段階では、恍惚になる対象の神と自分の意識がなくなり、ただ至福のみがある、ニルヴィカルパ・サマーディ（無分別三昧）です。いわゆる梵我一如を達成した段階です。その状態では、外から見たら、肉体の意識はまったくなく、呼吸も止まり、心臓も止まり、それこそ人間の最も感じやすい器官、目を指で触っても、三昧に入った人は気がつかないのです。それを達成した人はごくわずかしかいません。シュリー・ラーマクリシュナはそれを容易に達成し、時にはその状態に数ヶ月もいたのです。また、先ほど言ったように、神聖なこ

とを少し思い出すだけで、すぐに彼はその三昧に入ったのでした。私たちは三昧を達成したくてたまらないのですが、シュリー・ラーマクリシュナはカーリー女神に、「私は神を愛する信者と話したいのです、どうか三昧に入らせないで下さい」とよくお願いしたものです。

そのようなシュリー・ラーマクリシュナの所にヴィヴェーカーナンダはやって来て、「あなたは神を見ましたか?」と尋ねたのです。シュリー・ラーマクリシュナは、「はい、いつも神を見ていますよ、ちょうど今あなたを見ているようにね。でももっと親密にです。あなたに神を見せることもできます」と答えました。ヴィヴェーカーナンダは初めて神を見たというだけでなく、神について本当に知っている人に会ったのです。彼はシュリー・ラーマクリシュナの弟子になりました。しかし前にも言ったように、彼は言われたことをそのまま信じる人ではなかった、自分で経験してのみ信じる、現代的な人間でした。彼は大学で当時の西洋哲学を学んでいて、懐疑的だったのです。

イギリスの影響は植民地化されたインドのあらゆる面で文化的基盤を揺るがすものでした。それはたぶん明治維新の日本に西洋文化が入り、日本の伝統を揺さぶったのと同じか、それよりも大きなものだったと言えるでしょう。ここではこの点について深く入りませんが、多くの知識人が西洋の、またキリスト教の影響を受け、自らの文化、慣習、宗教に懐疑的になったことは事実です。

ヴィヴェーカーナンダがシュリー・ラーマクリシュナに会ったのは一八八一年、それから約五年間彼の下で霊性の修行をしました。彼は週に一、二度シュリー・ラーマクリシュナを訪れました。シュリー・ラーマクリシュナは、在家の信者が帰った後、夜になってから彼のような若者たちを集めて、よく教えたものです。寝る時間は短く、寝たかと思うと、「起きろ、起きて瞑想せよ。一生寝て暮らすつもりか」と言ってすぐに彼らを起こし、カーリー寺院のあちこちに彼らを送って朝方近くまで瞑想させるのでした。インドにおいては、日の出の一時間半前位をブランマ・ム

フルタム（ブランマの時間帯）と呼び、瞑想、修行をするのに最適な時間だと考えられています。

このようにシュリー・ラーマクリシュナの指導の下にヴィヴェーカーナンダは数々の修行をしました。あるとき、シュリー・ラーマクリシュナはヴィヴェーカーナンダに何が欲しいかと尋ねたところ、彼は、「食べ物を少しだけ食べる以外は、三、四日間ずっと三昧に浸っておきたい」と答えました。すると、シュリー・ラーマクリシュナは、「恥を知れ。お前は何とつまらないものを欲しがるのだ。もっと高い状態がある。『汝は全てに存在されるお方』といつも歌っているのはお前ではないか。神様はこの世の全てのものの中に宿っておられるのだ。私はお前が、世界で苦しんでいる何千人もの人々を庇護する、大きなバニヤンの木になると思っていた。自分の救済を望むなんて、なんと小さな心の持ち主なのだ」と言ったのです。

しかしこの後すぐ、シュリー・ラーマクリシュナはヴィヴェーカーナンダに最高の意識の状態、ニルヴィカルパ・サマーディを経験させます。

ヴィヴェーカーナンダは深い瞑想から意識を部分的に回復しますが、自分の身体がどこにあるか分かりませんでした。兄弟弟子の一人に自分の身体がどこにあるか聞きましたが、彼には見えません。それに驚いて、その弟子がシュリー・ラーマクリシュナの下に飛んで行き、ヴィヴェーカーナンダの状態を報告しますが、シュリー・ラーマクリシュナは、「あれだけ私にあの状態をせがんでやっと得たのだ、しばらくはその状態においておくがよい」と答えたのです。

ここでたいへん重要なことをシュリー・ラーマクリシュナが述べています。

この三昧の後、ヴィヴェーカーナンダがシュリー・ラーマクリシュナの部屋に行ったとき、シュリー・ラーマクリシュナは「さて、母なる女神がお前に全てを見せられた。しかしこの悟りは宝石が宝石箱の中にしまって置かれるように、お前から隠されて、わたしが管理しておく。鍵は私が持っておく。お前がこの地上での使命を果たした後にの

み、この箱は開けられ、今知ったように、全てを知るだろう」[5]と言ったのです。

この無分別三昧という状態に驚いたヴィヴェーカーナンダに対し、シュリー・ラーマクリシュナはそのような体験に数ヶ月も浸っていたのだと言っています。ヴィヴェーカーナンダはそれを達成する前にあらゆる種類の修行をし、あらゆる種類の霊的経験をしていたので、シュリー・ラーマクリシュナが亡くなった一八八六年八月一六日までに、彼は霊性の上で必要なものはほとんど体得していたのです。またシュリー・ラーマクリシュナも、彼の持っていた全ての霊性の力をヴィヴェーカーナンダに神秘的に伝授したと言っています。

シュリー・ラーマクリシュナはヴィヴェーカーナンダを若い弟子たちのリーダーにし、彼らと一緒に住み、彼らを指導し面倒を見るように命じました。同時にシュリー・ラーマクリシュナは他の弟子たちにも、ヴィヴェーカーナンダに従い、彼の健康に注意し、さらに彼があまり深く瞑想に浸ると肉体を捨てる恐れがあるので、彼にそうさせないようにと忠告したのです。

シュリー・ラーマクリシュナが亡くなった後、弟子たちは僧院を作り、そこで暮らしていましたが、彼らの放棄の心は強く、一人一人、神に完全に頼る遊行の生活に憧れ、僧院を出て行きました。普通、巡礼地や修行にふさわしい所を訪れ、そこに数日から数ヶ月あるいは数年暮らして、また遊行して回るのが放浪の僧たちの生活です。

ヴィヴェーカーナンダも同様に放浪の旅に出て、インドの北、西、中央そして南をほとんど歩いて旅します。野宿したり、貧しい人々の家に泊まったり、あるいは金持ちの家に泊まったり、時にはマハラージャと呼ばれる王様の宮殿に泊まったりして、あらゆる階層と色々な宗教の人々に会い、自らとても貴重な経験をすると同時に、会った人々全てに彼は強烈な印象を残しました。この放浪を通して、ヴィヴェーカーナンダは自分の救いを求める人間から全ての苦しむ人と自らを同一視できる人間へと変わっていったのです。

一八九三年にアメリカに渡る前、ヴィヴェーカーナンダは二人の兄弟弟子と出会ったときに、こう言いました。「私が何を達成したか知らないし、君たちの言ういわゆる宗教を理解することもできない。しかし私の心はとても大きくなった、そして他人の苦しみを強く感じることを学んだ。信じてくれ、たった一人でも助けることができるのならば、何千回でも地獄に落ちてもかまわないと思うようになった」と。ヴィヴェーカーナンダには自らの使命を達成する用意ができていたのです。

この年、シカゴで最初の世界宗教会議が開かれることになっており、ヴィヴェーカーナンダは多くの人にヒンドゥ教を代表して参加するように言われました。それとともに、彼はインドの貧しい人々のための救済活動のお金をアメリカで集めようと思っていました。

彼は一八九三年五月三一日にボンベイを出発し、シンガポール、香港、広東を経て日本に立ち寄り、そこからアメリカに着いています。彼は日本と日本人の印象として、世界で最も清潔な国であり、全てが絵のようであり、芸術的で、愛国心に富んでいると語っています。

さて、世界宗教会議は、信仰間の世界的対話の機会を作った最初の試みでした。キリスト教、仏教、イスラム教、ヒンドゥ教、儒教、道教、ユダヤ教、ジャイナ教、ゾロアスター（拝火教）、神道など世界を代表する宗教が参加しました。日本からは禅宗を代表して釈宗演師が参加しています。彼の演説草稿は、後に禅を西洋に広めた鈴木大拙氏によって英語に訳されています。

ロマン・ロランは世界宗教会議でのヴィヴェーカーナンダの演説について次のように語っています。「他の弁士たちはおのおの自分の神について、自分の宗派の神について語った。彼は――彼だけは――彼ら万人の神々について語り、宇宙的存在の中に彼らを包含した。ラーマクリシュナの呼吸が偉大な弟子の口を通して、もろもろの国境を吹き

消したのだった。……宗教会議はこの青年の雄弁家に熱烈な拍手喝采を送った[6]」と。

ヴィヴェーカーナンダはその後も数回話しますが、「そのつど、新しい論旨と同じ確信力を持って、時間と空間の制限のない、普遍的宗教のテーマを再び取り上げ、野蛮人の奴隷的物神崇拝から、近代科学の最も自由な創造的肯定にいたるまで、人間精神のあらゆる信仰箇条（クレド）を連合させ、それらを一つの偉大な総合に調和させた。それはそのいずれもを圧迫しないばかりでなく、めいめいの独自の本性に従って、成長し、開花する希望を全て助長するのである。人間の中に書きしるされた神聖と、その無限の進化の力以外には何の教義もないのだ[7]」。ロランはこのようにも語りました。

ヴィヴェーカーナンダの普遍的宗教のメッセージは新風をもたらし、アメリカの聴衆に情熱的に受け入れられました。彼は一晩で宗教会議で最も有名で影響力のある人物となり、全ての人の関心の的となったのです。宗教会議の前夜までは、彼を受け入れてくれる家はほとんどありませんでした。彼の歴史的講演の後、全ての家の門戸が彼に開かれました。

彼は宗教を次のように定義しています。

個々の魂は潜在的に神聖である。

目的はこの神聖さを、肉体と心を支配することにより、内に現すことである。

これを、仕事、あるいは礼拝、あるいは精神の統制、あるいは哲学のうち、一つ、あるいはそれ以上、あるいはそれら全てを使って神聖さを現すように試みよ。そして自由になれ。

これが宗教の全てである。教理、教条、儀式、経典、寺院や形式等は、二次的な詳細である[8]。

彼はアメリカ各地を講演して回ることになります。そして、一八九四年にニューヨークにヴェーダーンタ協会を設立しました。

同じ年に彼はシカゴで有名なロックフェラー財団を設立したジョン・D・ロックフェラーに会っています。この出会いについて、その当時最も有名なオペラ歌手の一人であったエンマ・カルヴェ女史は次のように言っています。

シカゴでヴィヴェーカーナンダが泊まっていた家の主人、X氏は、ある事業でジョン・D・ロックフェラーの共同出資者か提携者でした。ロックフェラーはX氏の家に泊まっているこの非凡で素晴らしいヒンドゥ教の僧について何回もX氏から聞いていました、そして何回も彼に会いに来るように招待されていました。しかし、ロックフェラーは、なんらかの理由でいつも断っていました。当時ロックフェラーはまだ彼の成功の頂点には達していませんでしたが、すでに影響力があり、強い意思の持ち主であったため、人の意見に耳を傾けたり忠告にしたがうこともあまりありませんでした。

しかしある日、彼はヴィヴェーカーナンダに会いたくないと思っていたにもかかわらず、ある衝動にかられ、そうするはめになります。ロックフェラーは直接友達の家に行き、扉を開けた執事を無視し、ヒンドゥ教の僧に会いたいと言いました。

執事は彼を応接間に通しますが、取り次がれるのを待つことなくロックフェラーはヴィヴェーカーナンダの書斎に入って行きました。誰が入って来たかを頭を上げて見ようとすらしない、机の後ろに座っているヴィヴェーカーナンダを見て、ロックフェラーは驚いたことと思います。……ヴィヴェーカーナンダは、ロックフェラーに、彼自身しか知らない多くの過去について語りました、そして、彼がすでに蓄えた財産は彼のものではなく、彼は単なる水路であり、彼の義務はこの世の幸福のために働くこと、すなわち、彼がこの世の人々を助け、福祉をす

るように、神が彼に全ての財産を与えたのだということをロックフェラーに理解させようとしました。

ロックフェラーは、誰かがそのようにずうずうしくも彼に話しかけ、彼に何をすべきかを言ったことにいらだちました。そして彼は、暇を告げることなく、部屋から出て行きました。しかし、約一週間後にふたたび、彼は誰に取り次がれることなくヴィヴェーカーナンダの書斎に行き、彼が以前のように座っているのを見て、一枚の紙を机に放り出しました。その紙は、ある公共団体の資金調達に莫大なお金を寄付する計画を告げたものでした。

ロックフェラーは、「さあ、見て下さい。もう、満足したでしょう、そしてそれに対し私に礼を言ったらどうですか」と言いました。

ヴィヴェーカーナンダは頭を上げずに、動きもしませんでした。そして、紙を手に取り静かにそれを読み、こう言ったのです、「お礼を言うのは君のほうだ」と。

……これがロックフェラーの公共の福祉のための最初の大きな寄付でした。[9]

この二年後に彼はスタンダード石油の仕事をやめ、残りの人生を慈善事業に費やしました。

一八九五年にはヴィヴェーカーナンダはイギリスに数ヶ月渡り、そこで講演をしました。そこからまたアメリカに戻り、ヴェーダーンタの活動を続け、一八九六年にふたたび渡英をして講演し、そこから彼はインドに戻りました。

一八九七年一月一五日にヴィヴェーカーナンダはコロンボに着き、それから南インドのタミル・ナードゥーに入りました。どこに行っても彼は世界を征服した英雄の如くインドの民衆によって熱狂的に迎えられ、彼らのために講演をしました。

インドでの彼のメッセージは、自らの文化、宗教そして自分自身に自信を持たせること、また奉仕の心を植えつけ

ることが中心でした。一八九七年五月一日に医療、教育、救援活動、貧しい人々への福祉活動をするためにラーマクリシュナ・ミッションを設立しました。その目的は以下の通りです。

一　全てのものが潜在的に神聖であり、いかにしてそれを行動と思想によって現すかという考えを広める。

二　全ての宗教は、異なった宗教において異なった名前で呼ばれているが、それは同じ真理であるというシュリー・ラーマクリシュナの体験に基づいた宗教の調和の考えを広める。ミッションは仏陀、キリスト、ムハンマドなどの全ての世界的宗教の創設者を尊敬する。

三　全ての仕事は祈りであり、人への奉仕は神への奉仕であると考える。

四　教育、医療奉仕、農村開発などを通して、人間の苦しみを除くために全ての可能な試みをする。

五　人類の幸福、特に貧しき人々としいたげられた人々の向上のために働く。

六　知識、愛、瞑想、仕事の実践を全て統合することにより、調和した人格の形成を目指す。[10]

ミッションが最初に行った救援活動はカルカッタで起こったペスト災害の救援活動でした。そのとき救援資金が足りなくなり困っていた僧たちに、ヴィヴェーカーナンダは、必要とあれば本部の土地を売ってでもこの救援活動をするというほど奉仕活動を重要視したのです。

一八九九年七月に彼は再度西洋に渡ります。アメリカの西海岸に初めて行き、一九〇〇年にサンフランシスコにヴェーダーンタ協会を設立しました。しかし自らの近づく死を予感し、ヨーロッパを通って一九〇〇年の一二月にインドに戻ります。その当時のヨーロッパの様子を見て、ロマン・ロランも「驚くべき言葉を発している」と言っているように、第一次世界大戦を予言するような言葉を残しています。[11]

インドに戻った後、ヴィヴェーカーナンダはカルカッタ郊外にある本部ベルル僧院でほとんどの日々を暮らし、ミッションと僧院、さらに西洋の仕事の手助けをしながら、多くの訪問客を迎えました。その訪問客中の一人が、岡倉天心です。彼は、ヴィヴェーカーナンダを一九〇一年東京で開かれる予定の宗教会議に招待するために会いに来たのでした。ヴィヴェーカーナンダは参加の約束をしますが、病気のために参加できませんでした。ヴィヴェーカーナンダは一九〇二年七月四日に本部ベルル僧院で亡くなりました。

ヴィヴェーカーナンダのメッセージ

ヴィヴェーカーナンダは自分のメッセージについて次のように言っています。

私の理想は本当に二つか三つの言葉にすることができる。それは人類に彼らの神聖さを説くことである、そしてそれを人生の全ての活動においていかにして現すかである。[12]

私たちがまず最初に覚えておかなければならないのは、彼の言葉は、自らの悟りの深みから来るものであるということです。

彼は人間の本当の性質は清らかで神聖であるといつも強調しました。世界宗教会議でウパニシャッドの一節を引用して、力強く言っています。

聞くがよい、永遠の至福の子供たちよ。なんと素晴らしい、希望に満ちた名前でしょう。兄弟の皆さん、あなた方をあの素晴らしい名前――永遠の至福の継承者と言う名前で呼ぶことを許して下さい。――そうです、ヒン

ドゥ教徒はあなたを罪人と呼ぶことを拒否します。あなたは神の子供であり、永遠の至福を分かち合う人で、神聖で完全なるものなのです。汝、地上の神々が罪人だと！　そのように人を呼ぶことが罪なのです。それは人間の性質への侮辱なのです。おお、獅子よ立ち上がれ、汝が羊であるという幻想を捨て去るのだ。あなたたちは不滅の魂だ、自由で、祝福された永遠なる霊魂だ。あなたたちは物ではない、肉体ではない。物はあなたたちの召使だ、あなたたちは物の召使ではない……。[13]

このような言葉を読めば、ロマン・ロランが次のようにヴィヴェーカーナンダについて語った理由が分かるでしょう。

ヴィヴェーカーナンダの言葉は偉大な音楽であり、文はベートーベンのスタイル、感動的なリズムはヘンデルのコーラスのマーチのようである。私は三〇年の隔たりを持ち、あちこちの頁にまき散らされたこれらの語録を、電気のショックのような震えを受けることなく触れることはできない。燃えるような言葉が英雄の唇から出たとき、人々がどれほどショックを受けたことであろうか、どんなに人を夢中にさせたことであろうか。[14]

ヴィヴェーカーナンダの人を鼓舞してやまない言葉には次のようなものがあります。

一　「立ちあがれ、勇猛であれ、強くあれ。全ての責任を自らで背負え、そして君が、君自身の運命の創造者であると知れ。」

二　「全ての愛は拡張であり、全ての利己心は収縮である。故に愛は唯一の生命の法則である。愛するものは生き、利己的なものは死につつある。故に、愛のために愛せよ、なぜなら、君が生きるために息をするのと全

く同様に、それが唯一の生きる法則なのだから。」

三　「一つの理想を取り上げよ。その一つの理想を君の人生とせよ。それを夢みよ、それを常に思え、そしてその理想に生きるのだ。……これが成功への道である。」

四　「誠実、清らかさ、そして利己的でないこと――これらがあるところはどこでも、その持ち主を潰すような力はこの世にはない。これらを備えていれば、一人の個人が全ての宇宙を敵に回して立ち向かうことができる。」

五　「光に満ちた宇宙に出よ。宇宙にある全てが君のものだ。手を伸ばし愛を込めてそれを抱いてみよ。もし君が一度でもそのようにしたいと感じたことがあるなら、君は神に触れたのだ。」

もう一つのメッセージは、前にも述べたように宗教の調和です。それは、ヴィヴェーカーナンダの、またシュリー・ラーマクリシュナの、そしてインドの永遠のメッセージです。現代の私たちが直面している最も難しい問題の一つに宗教間の争いがあります。

コネチカット大学哲学部のアンドルー・ペッシン教授は著書『神に関する質問（*The God Question*）』において次のような問題を提示しています。

「神への信仰、あるいはそのような信仰の様々な形は今、主な世界の紛争の中心にあり、西洋において増え続ける大衆の非難の精神の標的として残るであろう。」

「満足できる、そして筋の通った神の概念を発達させることがついに可能であろうか？　伝統的神の概念の続きであるように見られ、それに近くあり続ける一方で、たぶん無神論者から提出される理性と科学の価値を認め

る神の概念があるだろうか？　そして最も重要なのであるが、どんな神の概念がついに、自分を信じる者と考える国際的に、文化的にそして政治的に多様な（主な西洋の信仰の）共同体に受け入れられるであろうか？……どこかに、全ての理にかなった集団 ―― 無神論者や有神論者（ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒）を同様に満足させるであろう神の概念を築く供給源があるのだろうか？」[15]

ヴィヴェーカーナンダは「ある」と言います。

私の宗教は学ぶことである。私は私の聖書をあなたの聖書の光で読み、あなたの預言者のものと比べると、私の宗教の暗い予言が明るくなる。真理は常に普遍である。私たちヒンドゥ教徒は全ての宗教を受け入れます、イスラム教徒の寺院でお祈りし、ゾロアスター教（拝火教）の火の前で祈り、キリスト教の十字架の前で跪きます。[16]

そして普遍なる宗教についてこう言います。

普遍的宗教があるとすれば、それは場所と空間を持たず、それが説く神の如く無限で、その太陽は、クリシュナの信者とキリストの信者に、聖者と罪人に等しく輝き、バラモン教でも仏教でもキリスト教でもイスラム教でもなく、しかしこれら全ての総合であり、かつまた無限の発展の余地を持ち、全ての人間を、獣とあまり違わない最も低く這いずり回っている未開人からその頭脳（明晰さ）と心（の寛大さ）によってほとんどの人間の上に聳え立ち、社会に畏敬の念を与え、彼の人間性を疑わせるような最高の人間までを、その寛大さにおいて無限の腕に抱くものである。それは、その政策には迫害や不寛容の場はなく、全ての男女の神聖さを認め、その全視野と全

力が人間の真の神聖なる性質を実現するために、人間を助けることが中心とされている宗教である。[17]

すなわち真のヴェーダーンタの教えがそうであり、それに基づいて作られたラーマクリシュナ教団が普遍的宗教のメッセージを世界に広めているのです。

そして、宗教会議の最後の講演で彼は言いました。

……世界宗教会議は、神聖さや清らかさ、慈善は世界のどの教会の独占的所有物ではなく、全ての宗教が最も尊い性格を持った男性と女性を生み出したことを証明した。この証拠にもかかわらず、もし誰かが彼自身の宗教のみの存続を夢見るならば、私は心の奥底から彼を哀れみ、かりに抵抗があっても、全ての宗教の旗に、すぐ「戦いではなく援助」「破壊ではなく相互理解」「不和ではなく調和と平和」と書かれるであろうと指摘する。[18]

残念ながら、彼のこのヴィジョンはいまだに達成されていません。むしろ現在の原理主義者たちの台頭で状況は悪くなっているように見えます。しかし、その当時から比べると大きな変化が宗教間に起こり、今では宗教の調和のために働く人々が世界中に多くいます。一九九三年にシカゴ世界宗教会議百年祭を記念して世界宗教会議が復活され、世界各地で会議が開かれ、宗教間の理解を進めています。また各宗教も門戸を他の宗教に開放し理解を深めようとしています。このような活動は単にお互いの霊性の発展のためだけではなく、世界平和のためにも絶対に続けられなければいけません。

ラーマクリシュナ・ミッションの活動

さて、最後にヴィヴェーカーナンダが設立したラーマクリシュナ・ミッションの活動について見ましょう。

ミッションと言いましたが、実はラーマクリシュナ教団と言った方が正しく、それはラーマクリシュナ・ミッション（奉仕団）とラーマクリシュナ・マト（僧院）とに分かれており、ミッションは教育、医療、救援活動など、いっぽう僧院は特に霊性の活動をしています。このようなセンターが現在世界中に一七六あります。教団の僧の数は二千人弱です。

ミッションの活動

奉仕活動は主に、インド、バングラデシュ、スリランカなどで行われています。

医療活動は、目下一五の病院と一三〇の診療所、五九の移動診療所を持ち、約八百万人の患者の世話をしています。

教育活動は、幼稚園から大学まで七九一の教育施設を持っており、そこで勉強している生徒数は約三一万人です。

この他にも、村落開発、孤児院経営、災害救援活動など数多くの分野で奉仕活動を行っています。インドにおけるこれらの活動資金は一般からの寄付とインド中央政府および州政府からの援助でまかなわれています。

僧院の活動

僧院は霊性の活動を主体としており、特にラーマクリシュナ、ヴィヴェーカーナンダそしてヴェーダーンタの教えを広めています。インドではこれらのセンターはマト（僧院）と呼ばれ、西洋、オーストラリアそして日本ではヴェーダーンタ・ソサイエティ（協会）と呼ばれています。

それぞれのセンターでは講演や個人的面談の他、多くの本や雑誌の発行をしています。中でも一〇のセンターが異なった言語（インドの一〇以上の言語、英語、フランス語、スペイン語、日本語、ネパール語など）で、宗教と霊性に関する

本を発行しており、その数は千以上の表題の本になります。日本のセンターも数十冊の本を発行しています。また月刊誌、隔月刊誌、旬刊誌などが色々な言語（インドの八つの言語、英語、フランス語、日本語）で発行され、その数は二〇にのぼります。日本のセンターは隔月刊誌『不滅の言葉』を発行しています。

ラーマクリシュナとヴィヴェーカーナンダの普遍的なメッセージが世界中に広まるにつれ、私たちの教団の活動も拡張しています。実際、世界中でセンターの設立を願う人々も多くいます。でも、私たちの僧の人数に限りがあるので、すぐには希望に答えられないというのが実状です。

最後に、私たちに勇気と希望を与えてくれる次のヴィヴェーカーナンダの言葉で今日の講演を終えたいと思います。

人間の本質を、自らに教えよ、全ての人に教えよ！　眠っている魂に呼びかけよ、そしてそれがどのように目覚めるか見るがよい。この眠っている魂が、本来の自己を意識した活動に目覚めたときには、力、栄光、善、清らかさ、すべての優れたものが来るのだ。[19]

ご清聴ありがとうございました。

講師　スワミー・サティヤローカーナンダ

一九四九年九州生まれ。一九七三年神戸大学経済学部卒業。一九七四年大阪大学、インド哲学科研究生。一九七六年からラーマクリシュナ教団入門、ブラマチャーリー（修行僧）からインドのハイデラバードの僧院で、世界的に有名なインドの僧スワーミー・ランガナーターナンダ師の下で修行。師の秘書を経て、現在シンガポール僧院の副院長として霊性の奉仕活動を続けている。

1 『東洋と西洋におけるスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ』、ロンドン、ラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ・センター発行、二一〇―二一四頁、筆者訳。
2 『スアラ・ヴィヴェーカーナンダ（ヴィヴェーカーナンダの声）』序、一九六三年、インドネシア＝インド人会発行、筆者訳。
3 『プラブッダ・バーラタ』、一九二八年二月号、四九頁、筆者訳。
4 『シュリー・ラーマクリシュナの生涯』序、アドワイタ・アシュラマ発行、筆者訳。
5 スワーミー・ニキラーナンダ『ヴィヴェーカーナンダの伝記』、アドワイタ・アシュラマ発行、二〇一三年二九版、七五頁、筆者訳。
6 ロマン・ロラン『ラーマクリシュナの生涯、ヴィヴェカーナンダの生涯と普遍的福音』、宮本正清訳、みすず書房、『ロマン・ロラン全集』第一五巻、二六三頁。
7 ロマン・ロラン『ラーマクリシュナの生涯、ヴィヴェカーナンダの生涯と普遍的福音』、宮本正清訳、みすず書房、『ロマン・ロラン全集』第一五巻、二六三頁。
8 『スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ全集』第一巻、アドワイタ・アシュラマ発行、一二四頁、筆者訳。
9 『スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯』第一巻、彼の東西の弟子たち著、アドワイタ・アシュラマ発行、四五一―四五二頁、筆者訳。
10 ラーマクリシュナ教団ウェブ・サイト、http://www.belurmath.org/home.htm、筆者訳。
11 ロマン・ロラン『ラーマクリシュナの生涯、ヴィヴェカーナンダの生涯と普遍的福音』、宮本正清訳、みすず書房、『ロマン・ロラン全集』第一五巻、三四八―三四九頁。
12 『スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ全集』第七巻、アドワイタ・アシュラマ発行、四九八頁、筆者訳。
13 『スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ全集』第一巻、アドワイタ・アシュラマ発行、一一頁、筆者訳。
14 ロマン・ロラン著、E・F・マルコム・スミス英訳『ヴィヴェーカーナンダの生涯と普遍的福音』、アドワイタ・アシュラマ発行、一九九二年発行、第一二刷、一四六頁、筆者訳。
15 引用、M・シヴァラーマクリシュナ教授、論文「ヴィヴェーカーナンダ熟考――調和の師」、『スワーミー・ヴィヴェーカーナ

ンダ――新たな展望　スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ論集』、ラーマクリシュナ・ミッション文化研究所発行、一三二頁、筆者訳。

16 『スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ全集』第一巻、アドワイタ・アシュラマ発行、三三一頁、筆者訳。

17 『スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ全集』第一巻、アドワイタ・アシュラマ発行、一九頁、筆者訳。

18 『スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ全集』第一巻、アドワイタ・アシュラマ発行、二四頁、筆者訳。

19 『スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ全集』第三巻、アドワイタ・アシュラマ発行、一九二頁、筆者訳。

世界遺産ヴェズレー　ロマネスク芸術の宝庫

アンドレ・アンジェイ・グルシェフスキ

ヴェズレーは、フランス東部ブルゴーニュ地方、キュール川の谷を見下ろす丘の上にある趣ある美しい村である。ブルゴーニュ地方は、ワイン、料理、ロマネスク様式建築物で有名であるだけでなく、フランス文化に大きな貢献を果たした偉大な人物を多く輩出している。その中に、一八六六年にニエーヴル県クラムシーで生まれ、一九四四年ヨンヌ県ヴェズレーで生涯を閉じた二〇世紀を代表するノーベル賞作家・思想家のロマン・ロランがいる。彼は、自由を愛しスピリチュアルなことに深い関心を寄せるブルゴーニュ人の魂を持った人であった。ロマン・ロラン終焉の地ヴェズレーは、一九七九年に「ヴェズレーの教会と丘」という名でユネスコの世界遺産に登録されている。スペインの巡礼地「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」への巡礼路の始点のひとつという歴史的重要性もさることながら、サント・マドレーヌ大聖堂のタンパンはロマネスク彫刻の傑作として知られている。これは人類の創造的才能を表現する傑作である。これらのロマネスク美術を代表する彫刻作品によって高く評価されているヴェズレーの丘の教会についてこれから述べてみたい。

かつてこの丘の上にはケルト人の要塞があった。八七八年に初期カロリング様式の修道院が設立され、聖女マドレーヌの聖遺物がプロヴァンス地方からヴェズレーに移された一一世紀の初めから、フランス有数の聖

地・巡礼地となった。また、スペインの聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼道の最も重要な出発地として栄え、発展する。そのため、宗教的・政治的・経済的に大きな役割を果たすことになる。一一四六年三月三一日、修道院の丘の斜面で聖ベルナールが第二次十字軍遠征を説き勧める歴史に残る大演説を行い、その効果と影響は絶大なものとなった。一一六六年カンタベリー大司教トマス・ベケットが、イングランド王ヘンリー二世の破門を宣告したのもこの教会である。

しかし、教会の人気は、ヴェズレーに移されたはずの聖遺物と称するものが、一二七九年にプロヴァンス地方のサン・マクシマンで〝発見〟されたことで、凋落の一途をたどることになる。その後ヴェズレーの町は急速に衰退し、一五六九年にはサント・マドレーヌ・バジリカ教会と周りの修道院がユグノー（プロテスタントの一派）によって荒らされ、略奪を受けた。一七九〇年、フランス革命の中で小教区の一教会となり、荒廃し、ついには一八一九年に落雷のために南鐘楼が破壊された。

一九世紀中葉になり、フランス政府の予算投入で荒廃した修道院の修復が始まり、サント・マドレーヌ大聖堂はかつての姿を取り戻すのである。一八四〇年、「歴史的建造物」の視察官をしていた作家プロスペル・メリメがフランスの考古学的財産目録を作成中にヴェズレーの価値を再発見した。そこで、建築家ヴィオレ・ル・デュックに再建の仕事が委ねられ、この再建工事は一八七六年に完成する。ヴェズレーはその後再び巡礼の拠点となった。

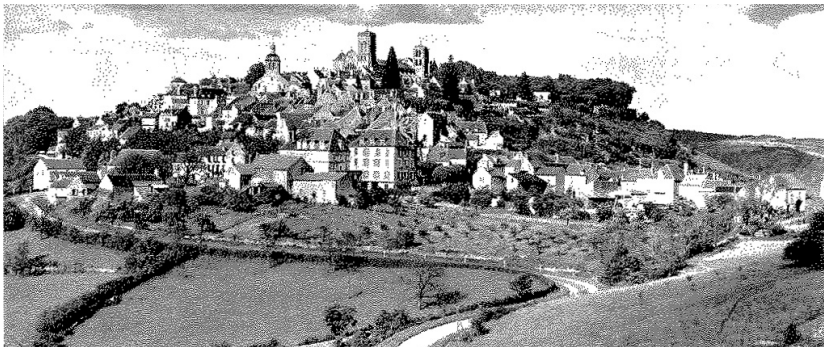
そして、一九七九年世界遺産となったヴェズレーの丘とサント・マドレーヌ教会は、ロマネスク芸術の宝庫とされ人々を魅了する。一〇～一一世紀に築かれた町を囲む城壁とその防衛のための塔、濠などの遺跡は、ヴェズレーの過去の繁栄を物語っている。一四世紀以降の伝統的ブルゴーニュ様式の建物と住宅。よく保存された旧市街地の街並みやサンピエール通りとバジリカ広場。建造物の屋根はマンサード（屋根裏）を備え、この地方特有の平瓦で覆われている。そして、ブルゴーニュ彫刻の白眉でありロマネスク彫刻の一頂点を画する、サント・マドレーヌ大聖堂身廊部、西扉口の彫刻はその繁栄の絶頂期一二世紀のものである。

ひときわ大きな中央タンパンには、両脇扉口で啓示されたキリストの救済の教義を宣べ伝える「教会」が表されており、中央部分は世界宣教の使命が使徒たちに託される「聖霊降臨」の場面である。巨大なキリストは、可視的存在ではなく霊的存在であることを感じさせ、その広げられた手の指先からは光線のように霊気が、動揺する使徒たちの頭上に降り注いでいる。キリストは上半身の正面性に対し下半身をプロフィールで捉える異例の像である。左右にペテロを筆頭に互いに重なり合う弟子たちの群像がある。動揺する姿態、表情豊かな大ぶりの手、霊気に巻き上げられる震える衣襞がこの瞬間の超自然の啓示を露わにする。

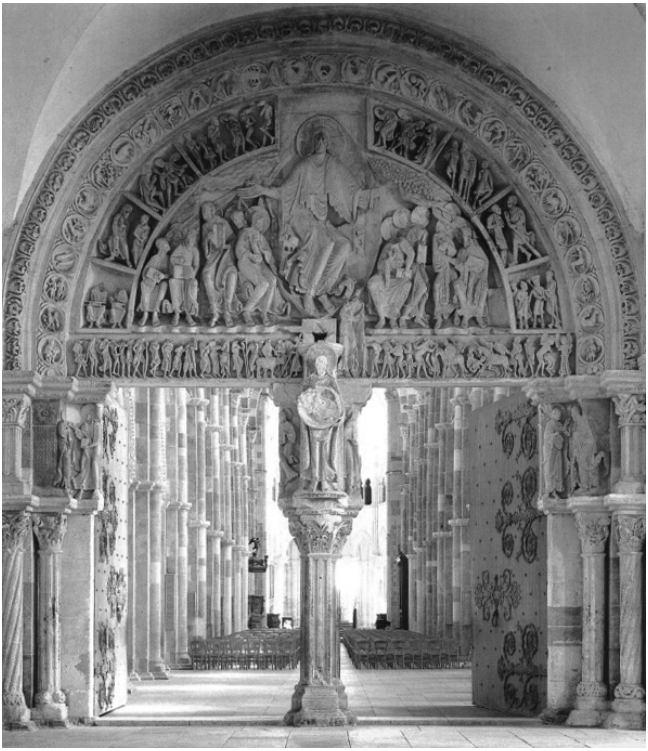
特に注目したいのは、右足が透けて見えるようなイエスの着ている柔らかそうな衣の襞の表現である。一定の幅を持った深さの浅い平行な線と渦巻模様のコンビネーションで表現されており、石材のもつ質感と繊細な美しさが表れている。流動感溢れるこの浮彫彫刻の図像は、典型的ロマネスク様式のタンパン装飾といわれ、一一二〇年以降の最高傑作のひとつとされる。しかし同時に、ほとんど丸彫りに近い高浮彫りで、キリストや使徒の柔軟な姿態の肉付け、露出した足の写実性、内省的な顔貌などイル・ド・フランスの初期ゴシックへ通じる道へと踏み出している。

半円に沿って並べられた箱の中や水平の楣石に世界の民族を配置するという独創的解決が示される。そこには、犬頭人、握手をする渦巻鼻の男女、大耳族などの異教徒たちが配され、これら地のはての民族にも善き福音が伝えられたことを示している。その中央柱には洗礼者ヨハネが円盤の中の贖罪の子羊を指さして立っている。それは、ロマネスク彫刻における洗礼者ヨハネ像の開始を告げると同時に、サン・ドニの人物円柱の予型でもある。タンパンを囲むアーチには黄道十二宮と月暦その他からなる二九個のメダイオンが並び、中央のキリストが全宇宙の時間と空間を統治するパントクラトールでもあることを示唆している。

さらにサント・マドレーヌ大聖堂身廊部で重要なものは、天井を支える支柱の上部を飾る柱頭彫刻である。約一〇〇にも及ぶ多様なシーンの彫刻が施され、聖人をは



ヴェズレー全景



中央タンパン

柱頭　神秘の粉挽き車

じめ聖書から引用した物語の場面、ギリシャ神話のモチーフ、空想上の怖ろしい怪物、戦いや殺人、誘惑シーンにも及ぶ。これらは全て一二世紀の作品であり、他では見ることのできないその数とバラエティ溢れる内容、精緻な表現に圧倒される。

その中で最もユニークなものを一つあげれば、「神秘の粉挽き車」であろう。左側の預言者モーゼが粉挽き器に麦を入れ、右側の聖パウロが粉袋を広げて出てきた粉を集めている。麦はシナイ山でモーゼが受け取った旧約の教えを表す。粉挽き車は十字をつけた車輪が示すように、キリストが受難によってその麦を挽き砕き潰して粉にすることを表す。この粉は当然新約聖書の教えであって、この粉を受け取った聖パウロが宣教に出るという、非常に暗示的で象徴的な表現である。柱頭という狭く限られた場所に作者が意図を凝縮し、穏やかな彫刻表現ながら宗教的な深い意味と教えを示している。

サント・マドレーヌ大聖堂の彫刻群は、ロマネスク時代の典型的特徴を表す優れた美術作品であるが、その様式は進化しながら数多の建築物を介して全フランスへ広がり、やがて新しいゴシック時代の扉を開くこととなる。

現代に生きる私たちは、ブルゴーニュの雄大な平原の中に浮かぶ聖なる場所ヴェズレーの丘に立つとき、中世の人々が情熱を傾けたサント・マドレーヌ大聖堂の歴史と輝きを、人類の宝として深く心に刻みたい。

（フランス人建築家）

『魅せられたる魂』と音楽　読書会から

清原章夫

ロマン・ロラン研究所の読書会で二〇一一年四月から読み始めた『魅せられたる魂』は、二〇一三年十月に読了することができた。私がこの作品を読んだのはこれが二度目であり、最初はやはりこの読書会で、一九九八年四月～二〇〇二年二月にかけてのことであった。

今回、約十二年ぶりに再読して、音楽がいろいろな場面で使われていることを発見し、驚いた。なぜ最初に読んだときに気づかなかったのか、今考えると不思議である。

もちろん、作曲家が主人公である『ジャン・クリストフ』に比べると、その量においてはるかに少ないが、その場面で使われている曲が担っているものは同じだと思う。単にその場面の背景音楽ではなく、登場人物の内面を表現したり、これからの運命を暗示する役割が与えられている。他の作者ならもう一行か二行加えて説明するところを、ロランは音楽に語らせている。

また、使われている作品は、ヘンデルから無調性音楽まで、作曲された時間や空間を超え多岐にわたっている。物語の中で音楽が流れ出すと、パリ大学で自らピアノを弾きながら音楽史を講義していたロランの顔が見える。

しかし、音楽はどれだけ言葉を尽しても、実際に聴いてみなければ全くわからないので、二〇一三年十二月と二〇一四年一月の二回にわたる読書会で、参加者の皆様と一緒に『魅せられたる魂』の中に出てくる音楽を登場する順番にCDで聴いた。

一　シャルパンティエ（仏・一八六〇～一九五六）

歌劇「ルイーズ」第三幕『その日から』

（一）場面　第二巻「夏」第一部　アンネットはシルヴィに、ロジェと別れて子供を生む決心を告げる。それに反対するシルヴィは「あたしたちがすること、あたしたちが自分の肉体ですることは、たいした結果にはならないんです。そしてそれをいいことにしているところさえあるんですよ、あんたたちの中産階級は。だから庶民階級の娘たちの恋愛の自由を『ルイズ』のなかにあるように讃めんばかりなのよ」と言った（「　」内以下すべて『魅せられたる魂』宮本正清訳）。

（二）演奏　マリア・カラス：ソプラノ　ジョルジュ・プレートル：指揮　フランス国立放送局管弦楽団

（三）曲目解説　モンマルトルの貧しい家の娘ルイーズと、名もない詩人ジュリアンは駆け落ちする。ジュリアンと一緒に暮らし始めたルイーズが、丘の上の小さな庭から、二人でパリの街を見下ろして、甘い愛の歌『その日から』を歌う。

（四）訳詞

自分を捧げたその日以来、私の運命が花開いたように感じる。
素晴らしい空の下で夢を見ているようだ
魂はあなたの最初の口づけによってまだ酔っている！
何て美しい人生！　私の夢ではなかった！
あぁ、私は幸せ！
愛が私の上に翼を広げる！
私の心の庭で新しい喜びが歌っている。
全てが震える、私の勝利を喜んでくれている！
私の周りの全てが笑顔と光と喜びだ！
そして私は愛の最初の日の素敵な思い出に心地よく震える！
何て美しい人生！　あぁ、私は幸せ！
幸せ過ぎる、そして私は快く震える
愛の最初の日の素敵な思い出に！

（高崎保男訳）

二　ベートーヴェン（独・一七七〇～一八二七）

ピアノソナタ第八番ハ短調『悲愴』第二楽章

（一）場面　第二巻「夏」第三部　アンネットの旧友ソランジュが、彫刻家の夫シュヴァリエに聴かせた曲。「そして楽しげな彼の顔は、妻が温順しく『パテティク　ソナタ』を弾くのを聴きながら、厳粛なメランコリの表情をせざるを得なかった。（ベートーヴェンもまた仲間の一人だったから）――。」

（二）演奏　ヴィルヘルム・ケンプ（元ドイツ「ロマン・ロラン友の会」会長）：ピアノ

（三）曲目解説　ベートーヴェン初期の代表作で、しだいに聴覚が弱くなっていくことに対する悲しみが表れている。ピアノソナタ第一四番『月光』と第二三番『熱情』とならんでベートーヴェンの三大ソナタと呼ばれている。

三　ドビュッシー（仏・一八六二～一九一八）

前奏曲集　第一巻　第一〇曲「沈める寺」

（一）場面　第二巻「夏」第三部　医師フィリップが、アンネットとの会話の中でピエール・アンプの小説について言及し、「……その後で、彼らは行ってマスロワに感動し、ドビュッシイの柔らかなアルモニーに午睡をとるのです……」と語っている。

（二）演奏　ドビュッシー：リプロデューシングピアノ

ロランと同時代を生きたドビュッシーの自作自演。

（三）曲目解説　ブルターニュ地方の「イス伝説」からインスピレーションを得た曲。海底より徐々に浮上した教会から鐘の音や合唱の声が聞こえてくる。そして教会が再び海の底へ沈んでいく情景を描写した音楽。

四　ショパン（ポーランド→仏・一八一〇～一八四九）

二四の前奏曲　第一五番変二長調『雨だれ』

（一）場面　第二巻「夏」第三部　中高等学校（リセ）の教授ジュリアンの次にアンネットは、有名な外科医フィリップを愛した。妻帯者の彼と正式な結婚が不可能な状況で、アンネットは危うく破滅しそうになるが、心の中でこの曲『宿命』を聞き、回生した。

（二）演奏　アルフレッド・コルトー：ピアノ

（三）曲目解説　二四の前奏曲は、バッハの「平均律クラヴィーア曲集」から大きな影響を受けており、平均律における二四の全ての調性を用いて書かれている。ショパンは、どの曲にも題名を付けておらず、『雨だれ』は後に付けられた。しかし、一般にはあまり知られていないが、コルトーが全二四曲に副題を付けていた。この曲には『死はすぐそこの影の中』と付けており、『宿命（fatum）』はこの一五番だと思われる。

五　シューマン（独・一八一〇～一八五六）

「マンフレッド」序曲

（一）場面　第四巻「母と子」下　第四部　アンネットは、ドイツ人画家フランツの恋人エリカの家の晩餐に招かれた。そこで数年ぶりにピアノで弾いた曲。「彼女自身が、その中に捉われて、アンネットはこの音楽の深淵の上に身を円め、自分の無意識に奏でる和絃からマンフレッドの序曲に先立つ哀歌が現れるのをみた。」

（二）演奏　オットー・クレンペラー：指揮　ニュー・フィルハーモニア管弦楽団

（三）曲目解説　バイロンの詩劇「マンフレッド」のために作曲した劇音楽の序曲。劇のあらすじは、かつて恋人を見殺しにした青年マンフレッドが、その過去を忘れようとアルプス山脈をさすらい続けた末、地下の国でその恋人と再会して許しを乞い、自らも死によって過去の苦しみから解放されるというもの。

六　セザール・フランク（ベルギー→仏・一八二二～一八九〇）

オラトリオ『至福』第三部

（一）場面　第五巻「予告する者」上　第二部「草原のアンネット」　アンネットは、自分が勤める新聞社の社長チモンからもらった衣装を、運悪くマルクに見られてしまう。それ以来遠ざかっていた二人が、偶然出会ったサン・ユースターシュ教会で聴いた曲。二人はそこで和解した。「コーラスは歌った。『幸いなるかな泣くものらは、彼らは慰めを得べければな

り……』そして突然、どうにもならなかった、彼は泣き出した。」

(二)演奏　アルマン・ジョルダン：指揮　フランス放送ニュー・フィルハーモニー管弦楽団　フランス国立放送合唱団

(三)曲目解説　フランク最大の宗教作品で、九部からなるオラトリオ（聖譚曲：宗教的内容をもつ物語を、独唱・合唱・管弦楽のために劇風に構成した作品。オペラと違い演技は伴わない）である。テキストは、新約聖書『マタイ福音書』をもとに、フランクの友人の妻、J・コロン夫人が書いた。

七　ワーグナー（独・一八一三～一八八三）

楽劇「ニーベルングの指輪」第三日「ジークフリート」より『森のささやき』

(一)場面　第五巻「予告する者」上　第三部「罪の風」

マルクはやっとのことで、ラジオ機械の販売取附け係という仕事にありついた。「マルクはへとへとになって、終日エオール（ギリシャ神話の風の神）の風袋（ラジオ機械）を弄りまわし、音響の大桶を出て帰る時には、律動に対して聴覚は熱が出るほど敏感になっていた、森のありとあらゆる戦慄が若いジークフリードの耳に開かれたように思われた。しかしそれは、ワグナーの憑かれた耳がそばだてられていたジールの岸辺の美しい森ではなかった。」

(二)演奏　オットー・クレンペラー：指揮　フィルハーモニア管弦楽団

(三)曲目解説　森で一人ジークフリートは、亡き母親への想いにひたる。小鳥の声に魅せられて角笛を吹いていると（ジークフリートのホルン・コール）、次第に森は明るくなっていく。

八　スクリャービン（露・一八七二～一九一五）

マズルカ　作品四〇―二

(一)場面　第五巻「予告する者」上　第三部「罪の風」

アーシャがアンネットに語った、幼児期の話に出てくる音楽。「人々はトルストイ派と自称して、男女両性のようなニジンスキーの軽快な跳ね踊りや、ス

クリャビンを荒れた舌で味わっていた。しかしストラヴィンスキーの予告的な荒々しさも薬味の唐辛子として受け入れていた……たしかに、戦いはもう来ていた。」

（二）演奏　スクリャービン：リプロデューシングピアノ
　スクリャービンによる自作自演。

（三）曲目解説　スクリャービンらしい、叙情性と神秘性にあふれた曲。最小限の手段で音楽を表現しようとする意図が強く表れている。

九　ストラヴィンスキー（露→米・一八八二～一九七一）
バレエ音楽「春の祭典」第一部大地の礼賛　二『春のきざし（乙女たちの踊り）』

（一）場面　第五巻「予告する者」上　第三部「罪の風」八と同じ。

（二）演奏　ピエール・モントゥー：指揮　パリ音楽院管弦楽団

（三）曲目解説　太古のロシアの春の到来とともに、太陽神への生贄として一人の乙女が選ばれる。彼女は生贄の踊りを踊った末に息絶え、長老たちによって捧げられる。この『春のきざし（乙女たちの踊り）』は、春の到来を弦楽器の激しいリズムで表している。

十　ベートーヴェン（独・一七七〇～一八二七）
交響曲第七番イ長調　第二楽章（リスト編曲ピアノ版）

（一）場面　第六巻「予告する者」中　二　出産一　第二部「フロレンスの五月」　南イタリアの貴族ブルノーがメッシナ大地震（一九〇八年）ですべての家族を失う前夜、家族と最後の時を過ごした際、妻のフロラがピアノで弾いた曲。「ところで、その夜は、若い母――立派なピアニストで、ローマではサガンバチに師事した母が、ピアノの鍵盤を弄んでいるうちに、第七交響曲の神秘的なアンダンテを弾いてみたい窃かな衝動にふっと（何故か？）駆られた。ところがその厳正な、陰惨なマーチ――（俗に婚姻と呼んでいるが、誰との結婚か？　死か？）――の最初のクレシェンドからすでに少女は啜り泣いて、いやだ！と叫んで逃げ出した。」

（二）演奏　シプリアン・カツァリス：ピアノ
（三）曲目解説　一八八四年の冬パリで、初めてこの曲を聴いた一八歳のロランは、ベートーヴェンの啓示を受けた。リズムの発展を最優先させた交響曲で、ワーグナーは「舞踏の聖化」と絶賛し、特に第二楽章は「不滅のアレグレット」と呼んだ。

十一　シューベルト（墺・一七九七～一八二八）
歌曲集「美しき水車小屋の娘」から第二〇曲『小川の子守歌』

（一）場面　第六巻「予告する者」中　二　出産一　第二部「フロレンスの五月」ブルノーは、ジュリアンの娘ジョルジュとおしゃべりしていた際、「臙脂をつけない、果物のような赤い金色の唇の上に、彼はシューベルトの『美しい水車小屋の娘』や、小川の子守唄をポリフェモス（ギリシャ神話の一眼の巨人）の深淵の上（ブルノーの家族と義妹とを一瞬のうちに殺したメッシナの地震をさす）で唄った若い義妹の屈託のない楽しげな微笑を、あたかも感動的な夢の蜃気楼の中におけるように、楽しさと憂愁とをもって、思い泛べるのだった。」
（二）演奏　フリッツ・ヴンダーリヒ：テノール　フーベルト・ギーゼン：ピアノ
（三）曲目解説　ドイツ・ロマン派の詩人ウィルヘルム・ミュラー（一七九四～一八二七）の詩による、全二〇曲からなる歌曲集。「冬の旅」「白鳥の歌」と並び「シューベルト三大歌曲集」の一つと称される。さすらいの旅に出た粉挽き職人が美しい水車小屋の娘に恋をする。しかし、娘は狩人に心を奪われてしまい、失恋した若者は小川に身を投げてしまうという悲しい物語である。若者の亡骸は、第二〇曲『小川の子守歌』を聴きながら海まで運ばれて行く。
（四）訳詞
おやすみ、おやすみ！　目を閉じて！
旅人よ、あなたは疲れ、家に帰って来ました。誠実がここにはあります。
わたしのもとで横たわりなさい、海が小川を飲み尽くすまで。

あなたを涼しく寝かせましょう、柔らかい寝床の上で、青い澄み切った小部屋の中で。
こちらへ、こちらへ、揺れるものよ、わたしのもとでこの子を揺らして眠らしておくれ。
狩りの角笛が緑の森から鳴り響いたら、わたしはあなたの周りでざわめき、うなりを上げましょう。
覗き込まないで、青い花々よ！　わたしのもとで眠る者の夢を重苦しくしてしまうから。
去りなさい、去りなさい、水車小屋の小橋から、悪い娘よ、この子をおまえの影が起こさないように！
わたしに投げ込むのです、おまえのハンカチをそっと、わたしがこの子の眼をしっかりと覆えるように！
おやすみなさい、おやすみなさい！　すべてが目覚めるその時まで、喜びから眠りについて、苦しみから眠りについて！
満月が昇り、霧が晴れると、上には空が、何て広々としてることでしょう！

（若林敦盛訳）

十二　アルノルト・シェーンベルク（墺・一八七四～一九五一）

弦楽四重奏曲第二番嬰ヘ短調　第四楽章「忘我」

（一）場面　第七巻「予告する者」中　二　出産二　第三部「聖なる道」　偶然ラジオをとりつけたシルヴィは音楽という未知の泉を発見する。「五十の坂を越えてから、彼女はピアノを習った。（中略）その後、彼女の華やかだった頃、彼女は自宅で音楽会を催した。それはもちろん、最新流行の『耳潰し』、流行の『無調性』だった。彼女にはてんでわからなかった、そして心の底ではそれらの若者たちが人の鼓膜を破るような音を立てるために苦心するのを笑っていた。」

（二）演奏　ラサール弦楽四重奏団　マーガレット・プライス：ソプラノ

（三）曲目解説　一九〇七～一九〇八年に作曲された、歌曲と弦楽四重奏を組み合わせた新しい試みの作品。一～三楽章は調性が保たれているが、四楽章は完全な無調音楽である。詩はドイツのシュテファン・ゲオルゲ（一八六八～一九三三）によるもので、三楽章

は「連禱」四楽章は「忘我」が使われている。

十三　ベルリオーズ（仏・一八〇三～一八六九）

劇的物語「ファウストの劫罰（永劫にわたる罰）」から『ハンガリー行進曲（ラコッツィ行進曲）』

（一）場面　第七巻「予告する者」中　二　出産二　第三部「聖なる道」　ピアノの稽古についたシルヴィは、音楽会にも行くようになった。「（桟敷の聴衆は）そこから出るときには、眼が飛び出している。シルヴィも、『劫罰』の若干の楽曲やベートーヴェンの幾つかのフィナーレにはそんな眼をしていた。最後の和絃で、彼女は足を踏み鳴らした。すると隣席の人々は、この小柄な横柄な女が感動に乱れた顔をして、鼻孔で呼吸しながら、足踏みするのを面白がって互いに眼くばせした。」

（二）演奏　エドゥアール・コロンヌ：指揮　コロンヌ管弦楽団　ロランは、学生時代にコロンヌの指揮する演奏を頻繁に聴き多大な影響を受けた。一九〇六年の録音であり、『ジャン・クリストフ』執筆当時のロランが、隣の座席で一緒に聴いている錯覚にとらわれる。

（三）曲目解説　ゲーテの『ファウスト』をフランス語訳で読んだベルリオーズは、たちまち虜になり、オーケストラに声楽、合唱を加えた全四部、演奏時間約二時間二〇分の大作を作曲した。第一部でハンガリーの丘の上にたたずむファウストは、気分が沈んでいる。彼の耳には農民の歌や踊りが聞こえているが、やがて遠くから、『ハンガリー行進曲（ラコッツィ行進曲）』が聞こえてくる。

十四　ベートーヴェン（独・一七七〇～一八二七）

交響曲第七番イ長調　第四楽章

（一）場面　第七巻「予告する者」中　二　出産二　第三部「聖なる道」　六と同じ。

（二）演奏　ウィルヘルム・フルトヴェングラー：指揮　ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

（三）曲目解説　ロランは『ベートーヴェンの生涯』でこの曲についてこう述べている。「北ドイツでは『第

七』は酔っぱらいの作品だと評された。――確かに酔っぱらいには相違ない、ただし自己の天才の実力に酔っているのである。彼は自分自身についていった――『俺は人類のために精妙な葡萄酒を醸す酒神だ。精神の神々しい酔い心地を人々に与える者はこの俺だ。』ベートーヴェンが第七交響曲の終曲でディオニュソス（ギリシア神話に登場する豊穣とブドウ酒と酩酊の神）の祝典を描写しようとしたと書いているワーグナーの説が正しいかどうか私は知らない。私自身はむしろ、この激しいオランダ的祝祭ケルメス（村祭り）の中に、彼のフランドル的血統（祖父がアントワープの生まれ）の印を認める。――訓練と服従との国において、誇らしげにあらゆる額縁からはみ出てしまうような彼の表現と動作との大胆さの中に私が彼のこの血統の特徴を認めるのと同様に。しかも、この『第七交響曲』の中には他の作に類例がないほどに率直で自由な力が現われているのである。それは超人的精力の無方途な濫費――濫費の楽しみである。横溢し氾濫する大河の楽しみである。」

（片山敏彦訳）

十五　ヘンデル（独→英・一六八五～一七五九）

歌劇「セルセ」から『ラルゴ（オンブラ・マイ・フ）』

（一）場面　第七巻「予告する者」中　二　出産二　第三部「聖なる道」　アンネットが死の床に就く前夜、ジョルジュが即興でヴァイオリンを弾いた。「燐光の光る夏の夜に、ヴァイオリンの音が起こった。アンネットとジャンは息を殺して傾聴した。（中略）それは重々しかったが、悲しみはなかった。それからたちまちそのあらわな線は一本の枝のように波立っていたのが、若々しい変調の明るい朗かな花を咲かせた、春の桜のように。風が梢をすぎた。梢は琶音（アルペジオ）の雨の中に実を落とした。テーマがあらわに戻ってきた。その純な誇りの高い面影はヘンデルのラルゴに似通っていた……ヴァイオリンは沈黙した。」

（二）演奏　ルネ・フレミング：ソプラノ　デビッド・ブ

ラッカダー：指揮　ジ・エイジ・オブ・エンライトゥンメント管弦楽団

(三)曲目解説　プラタナスの木陰で若いペルシャ王のセルセが歌うアリア。あらすじは、弟アルサメーネスの恋人ロミルダを自分のものにしたいセルセは、ロミルダにアルサメーネスがほかの女性を愛しているという偽の手紙を見せる、そして自分を捨てた男に未練があるのかと迫るが、アルサメーネスとロミルダは無事結ばれ、セルセも新しい愛を見出すというもの。

(四)訳詞

こんな木陰は　今まで決してなかった　緑の木陰親しく、そして愛らしい、よりやさしい木陰は

（訳者不詳）

このように、実際の音楽を聴きながら読むと、その場面が立体的になり色彩を帯びてくる。もちろん、個々の曲は、映画音楽のようにこの小説のために作曲されたものではないが、まさにこの音楽しかありえないような選曲がされていたのだ。そして、今後これらの曲を演奏会やCDで聴くたびにアンネットやマルク、シルヴィたちの面影が心に蘇ることだろう。

〈ユニテ・フォーラム〉

聖地ヴェズレーから京都へ

有馬　通志子

長い職場での生活が終わった後、私はフランスのツアーに加わった。それはヴェズレーに立ち寄る旅であり、ヴェズレーは作家ロマン・ロランの終焉の地であるから。旅のバスがブルゴーニュのヴェズレーの丘のふもとについたときは午後を過ぎていた。

翌朝、早くひとり、坂を上った。ロランの家を写真に収めるにはまだ暗く、古いロマネスクの聖マドレーヌ寺院の正面扉も閉ざされたままだった。ふと出会えた中年の女性から横の入口より入ることができると聞く。この時間、暗い聖堂の中、ローソクの灯が何本も揺れていた。あれほどの静けさがあろうか。その時、太陽が昇り一条の光が差し込み、私の影が前に長く伸びた時の思いは言葉に尽くせない。

白んできた丘を下り、中腹のぴったりしまった古びたロランの家の門前に、わたくしはそのために持参した貴重なロマン・ロランの写真を立て掛け、写真を撮った。中世にはここで十字軍への呼びかけがなされたというその霊感の丘。第二次大戦中は、ナチの軍隊が通ったと。ファシズム反対を発しつつ、このヴェズレーで終戦を待たず七十八歳の生涯を閉じたロマン・ロラン。

思い返せば、丘のマドレーヌ寺院まで両側の家々をロマン・ロランの家を探しつつ登ったが見つからず、寺院横の土産物店の主人に教えてもらったのだった。丘の上から眺めたフランス・ブルゴーニュの平原、それはフラ

ンス文学の世界だ。今も目を閉じると深い谷が見える。ロランの家を教えてくれたみやげもの店の主人が私を日本人だと知って「宮本エイ子さんを知っているか」と聞かれる。私は以前、新聞の記事を読んだだけなのに、とっさに「ウイー」と答える。

旅を終えて帰国し、思い切ってロマン・ロラン研究所を訪ねた。そして今に至っている。

私にはこれ以上の海外の旅はもうできないであろう。

田谷里美さんのこと　読書会の友を偲んで

中田裕子

ロマン・ロラン研究所の読書会に行く途中、阪急電車が淡路駅に近づくと「田谷さん、乗ってこられるかしら」と、今も思ってしまいます。

昨年の六月の初旬、宮本さんからの電話だった。

「田谷さんが五月末に亡くなられたのを知っておられましたか」

と悲痛な声で電話をもらったときは、突然の訃報にしばらく言葉が出ませんでした。本当に悲しい知らせでした。

田谷さんと私はロマン・ロラン研究所の活動を通して知り合いました。

行き帰りが同じ阪急電車でしたので、車内で偶然お会いしたときはロマン・ロランのことは勿論、お互いの趣味や家族のことまでも話しての往復になりました。

田谷さんは、読書会では、テキストにたくさん印をつけて、しっかりと読んでこられました。多弁ではありませんでしたが、誰も気づいてないことまでも読み取っておられ、感想や意見を簡潔に解りやすく話されるので、話が深まり読書会が盛り上がることが度々でした。また、読書会の後のお茶のお世話を手際よくしてくださいました。田谷さんの入れてくださるお茶はおいしくホッとした気持ちなりました。それは、何事も心をこめてされる方だったからだと思います。

研究所の親睦を図るお茶のお稽古にも、京大生であっ

たお嬢さんと熱心に参加されました。
故佐々木斐夫先生の奥様が先生でしたが、「とてもよいお手前です。」と田谷さんに感心されておられました。
本当に上品な手つきで落ち着いてお茶をたてられました。「上達が早いです。」とお褒めの言葉をいただいているお嬢様の練習を、心配そうにじっと見つめ、済むとホッとされていた様子が印象的です。

読書会やその他の行事をしばらくお休みされていたので「どうされたのかしら」と気になっていたある日、豊中駅から乗った車内で田谷さんに思いがけず出会いました。
「高齢な両親が相次いで重い病気になり、それぞれが離れた病院に入院したので大変でした。容態が落ち着いてきて少し楽になってきたところです」と、少々疲れた様子で話されました。そして最後に、
「これからもロマン・ロラン研究所の読書会や行事は絶対止めないで続けたいと思っています。今日、中田さんに出会って本当によかった、宮本さんによろしく伝えておいてください。」
と心強く話されました。次の停車駅十三で下車されましたが、いつもと違いホームに立ち止まって私を見送ってくださったので、私も「よかった、また近い内にお会いできそう」と思いながら窓越しに答えました。別れた後、なぜか切ない気持ちがよぎったのを覚えています。
これが田谷さんとわたしの最後の別れになってしまいました。

ロマン・ロラン研究所の読書会やその他の行事で、もう田谷さんとお会いすることは出来ないと思うと、さびしい気持ちで胸が一杯になってきます。

私が、ロマン・ロランの作品を読むときや研究所の活動に参加するときは、ロマン・ロランが大好きだった田谷里美さん、あなたのことをいつまでも思い出すことでしょう。

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長　宮本　正清

ロマン・ロラン（一八六六～一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないのであります。

しかし、ロマン・ロランの真の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、真に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を堕落と頽廃から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。

このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために、喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー　●講演会
公開講座　●読書会・研究会
●機関誌『ユニテ』発行

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

●ロマン・ロランの著作に感動、また
●彼の周辺の芸術家たちに興味、
●あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感
いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。

●**特典**＝①機関誌「ユニテ」の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。

●**会員**＝一般賛助会員は年会費一口五千円から。特別賛助会員は年会費十口以上。

ロマン・ロラン研究所の活動

一九七一
5・15　ロマン・ロランと日本の青年（映画『ロマン・ロラン』上映）　宮本　正清
11・27　苦悩のなかのインド　森本　達雄
一九七二
6・24　ロマン・ロランとフランス革命　波多野茂弥
一九七三
5・26　ロマネスク美術　ブルゴーニュ地方の教会を中心にして　高井　博子
12・18　私の人間観　末川　博
一九七四
6・29　私の通った芝居の道　毛利　菊枝
12・5　ロマン・ロラン没後三十周年記念――講演と音楽の夕べ　佐々木斐夫　演奏：玉城　嘉子
一九七六
7・11　ロマン・ロランとゲーテ　南大路振一
ユダヤ民族と西洋文明　岡本　清一
一九七七
2・10　中国文学とロマン・ロラン　相浦　杲
一九八九
4・20　ロマン・ロランの反戦思想と現代　加藤　周一
6・9　ロマン・ロラン全集と私　小尾　俊人
9・29　ロマン・ロランの革命劇から――フランス革命二〇〇周年の記念に　中川　久定
11・17　ロマン・ロランとの出会いから　尾埜　善司・今江　祥智
一九九〇
1・27　ロマン・ロランに負うもの――平和と音楽　新村　猛
6・2　ロマン・ロランとガンディー　森本　達雄
9・26　『魅せられたる魂』と私　樋口　茂子
10・26　占領時代における日本社会とロマン・ロラン　小尾　俊人
11・30　ロラン・片山・ヘッセ　宇佐見英治
一九九一
3・1　ロマン・ロランと私　松居　直

4・19　（財）ロマン・ロラン研究所設立二十周年記念
レクチャー・リサイタル　杉田　谷道
〝ベートーヴェン後期ピアノ・ソナタの夕べ〟

6・4　ロマン・ロランとベートーヴェン　青木やよひ

9・27　ロマン・ロランとデュアメル　村上　光彦

10・25　ロマン・ロランの思想の二面性　兵藤正之助

11・29　初めにロマン・ロランあり　岡田　節人

一九九二

6・26　〈大洋感情〉と宗教の発端　岩田　慶治

9・25　ロマン・ロランとイタリア　戸口　幸策

10・30　ロマン・ロランの革命劇をめぐって　鶴見　俊輔

11・27　宮本正清　没後十年記念追悼会
ピアノ演奏：山田　忍
静かにやさしき顔　佐々木斐夫
不思議な静けさ――宮本正清の世界　小尾　俊人

一九九三

1・29　自伝的諸作品について　佐々木斐夫

1・29　ロマン・ロランの演劇的世界　石田　和男

5・24　ガンディーとロマン・ロラン　山折　哲雄

6・23　『魅せられたる魂』を語る（前）　重本恵津子

10・15　『魅せられたる魂』を語る（後）　重本恵津子

一九九四

1・28　いま、ロマン・ロランを語る
尾埜　善司・今江　祥智

9・9　ロマン・ロランと音楽　中野　雄

10・14　神秘と政治　ロマン・ロラン、その思索と行動の
あいだ　B・デュシャトレ
ロランとフランス革命　河野　健二
自然科学とゲーテ　岡田　節人

12・3　ロマン・ロランとドイツ音楽　岡田　暁生
――ベートーヴェン、デュカ他作品
ピアノ演奏：小坂　圭太

12・24　おはなし「ピエールとリュス」と「また逢う日まで」　今江　祥智
映画上映「また逢う日まで」（監督　今井　正）

一九九五

1・27　ロマン・ロランと日本人たち　小尾　俊人

6・2　私の歩んだフランス文学の道　片岡　美智

11・10　ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺　岡田　暁生

一九九六

6・14　ロマン・ロランとの出会いから　鄭　承姫

11・16　レクチャーコンサート　岡田　暁生

ベートーヴェン：ピアノソナタ　第21番、28番

ピアノ演奏：北住　淳

11・18　「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン　本山　美彦

一九九七

1・17　「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと魯迅　區　建英

6・6　わが青春と一生　岩淵龍太郎

9・19　ロマン・ロランと結核の時代　福田　眞人

10・4　ピアノとチェロのための夕べ

ピアノ演奏：北住　淳

ロマン・ロラン記念コンサート

チェロ演奏：小川剛一郎

一九九八

6・8　ロマン・ロランと種蒔く人　柏倉　康夫

9・25　ロマン・ロランと政治的魔術からの解放　柳父　圀近

10・30　ロマン・ロラン記念コンサート

ピアノ演奏：小坂　圭太

レクチャー：岡田　暁生

11・25　ロマン・ロランと大佛次郎　村上　光彦

一九九九

6・11　ロランと音楽　岡田　暁生

10・8　「日本ロマン・ロランの友の会」五十周年記念〝園田高弘ベートーヴェンを弾く〟　園田　高弘

お話とピアノ演奏

12・1　ロマン・ロランとインドの精神　森本　達雄

二〇〇〇

10・13　ロマン・ロラン没後五十五年と日本　佐々木斐夫

二〇〇一

2・23　ロマン・ロランと〈老いの豊かさ〉　青木やよひ

シンポジウム　今江　祥智

尾埜　善司

6・23　（財）ロマン・ロラン研究所設立三十周年記念コンサート　神谷　郁代

〝神谷　郁代　ベートーヴェンを弾く〟

12・21　ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー
ディディエ・シッシュ

二〇〇二

4・20　ロマン・ロラン記念スプリングコンサート
ヴァイオリン演奏：ピェール・イワノヴィッチ
ピアノ伴奏：郁子・イワノヴィッチ

11・11　ロマン・ロランの後継者たち　蜷川　譲

二〇〇三

4・19　ロマン・ロラン記念スプリングコンサート
演奏：ピエール・イワノヴィッチ
郁子・イワノヴィッチ

5・10　ロマン・ロランの作品による音楽とレコード
尾埜　善司
ピアノ演奏：沖本ひとみ

5・31　戦争と平和、科学を考える
プリーモ・レーヴィを語る
ジル・ド・ジェンヌ
解説　西成　勝好

11・22　ロマン・ロランを読みながら　今の世界を考える
峯村　泰光

二〇〇四

5・29　〝きょう〟を読む『京都、半鐘山の鐘よ　鳴れ！』
朗読とおはなしの会
おはなし　尾埜　善司　朗読　村田まち子

7・16　ロマン・ロラン記念サマーコンサート
演奏：ピエール・イワノヴィッチ
郁子・イワノヴィッチ

9・11　抗日中国における中仏文化交流
中国の知識人はロマン・ロランをどのように評価したか
内田　知行

二〇〇五

1・29　現代の法とヒューマニズム
加古二郎と瀧川事件　園部　逸夫

6・12　ロマン・ロラン没後六十年記念コンサート
梅原ひまり　神谷郁代デュオ
ヴァイオリン演奏：梅原ひまり
ピアノ演奏：神谷　郁代

6・25　生々発展する魂
ゲーテとベートーヴェンそしてロマン・ロラン
青木やよひ

10・29　交差する肖像
ロマン・ロランとクローデル
J・F・アンス
通訳　原口　研治

二〇〇六
11・24　戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン
山口　俊章

二〇〇七
1・20　日本におけるロマン・ロラン受容史
シッシュ・ディディエ
通訳　シッシュ由紀子

琴　笙　ヴァイオリンによる新春コンサート
大谷　祥子

豊　剛秋・増永雄記

2・3　歌と朗読の会
歌：下郡　由
「ピエールとリュース」朗読
尾埜　善司　ほか　会員

7・21　朗読の会
第一次世界大戦とロマン・ロラン
そして『母への手紙』

村田まち子・宮本エイ子

10・13　中国研究を通しての日仏交流
京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合
狩野　直禎

11・6　『ピエールとリュース』を演出して
今藤政太郎

二〇〇八
3・8　朗読の会
親子で読む・聴く『ジャン・クリストフ物語』
会員たち

6・28　中国におけるロマン・ロランの紹介者・傅雷
榎本　泰子

9・16　前理事長尾埜先生への感謝の会・記念講演
ロマン・ロランと日本人たち　尾埜　善司

10・4　ロマン・ロラン国際平和シンポジウム
宮本正清の詩『焼き殺されたいとし子らへ』
「わらい」朗読　尾埜　善司
フランソワ・ラベット

10・4　ロマン・ロランが愛したベートーヴェン
ピアノ演奏：神谷　郁代

二〇〇九

2・7　朗読の会とピアノ演奏『ジャン・クリストフ物語』
ピアノ演奏：岩坂富美子
朗読：下郡　由ほか

「日本・ロマン・ロランの友の会」六十周年記念

6・13　レクチャー・ギター　コンサート　西垣　正信

9・30　フー・ツォン　ピアノリサイタル　フー・ツォン

10・24　犠牲の宗教への問い　高橋　哲哉

二〇一〇

7・24　小林多喜二とロマン・ロラン―反戦・国際主義の文学を求めて―　エヴリン・オドリ

9・29―10・3　一九五三年のフランスの子供の絵特別出品（京都市幼児・児童・生徒作品展及び姉妹都市交歓作品展）

10・9　ピアノリサイタル　神谷　郁代

二〇一一

2・19　朗読の会　トルストイ没後一〇〇年記念『トルストイの生涯』『伯爵様』
会員たち

二〇一一

11・19　フロイトとロラン ―― 災厄の後に、幻想の前で
小森謙一郎

二〇一二

1・27　『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会
―― 小尾俊人氏へのオマージュを込めて ―― 京都会場
講演「ジャン・クリストフ」を読みかえして　村上　光彦
ロマン・ロランとみすず書房と小尾俊人さん　守田　省吾
スピーチ　フィリップ・ジャンヴィエ・カミヤマ

3・5　朗読の会
女たちの祭典・ワークショップ『魅せられたる魂』
アンネットとシルヴィ　会員たち

3・29　『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会
―― 小尾俊人氏へのオマージュを込めて ―― 東京会場
琴とヴァイオリン合奏
琴：大谷　祥子　ヴァイオリン：白須　今
『春の海』　宮城道雄　作曲
『夢のあと』　フォーレ　作曲

7・28　朗読の会『魅せられたる魂』
　　アンネットとシルヴィ
　　於　ロマン・ロラン研究所
10・20　「ロマン・ロランと賀川豊彦」　濱田　陽

二〇一三

6・22　ヴィヴェーカーナンダ生誕一五〇周年記念
　　スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯と
　　メッセージ
　　スワーミー・サティヤローカーナンダ
7・6　〈朗読とピアノ〉　オマージュ宮本正清
　　〈朗読〉『戦時の日記』『ジャン・クリストフ物語』
　　詩集『焼き殺されたいとし子らへ』
　　朗読　会員たち
　　〈ピアノ〉　岡田　真季
　　作曲　ポール・デュパン
　　曲目　『ジャン・クリストフ』
11・16　世界遺産ヴェズレー　ロマネスク芸術の宝庫
　　アンドレ・アンジェイ・グルシェフスキ

購入図書

二〇一一年

1※、Romain Rolland, *Haendel*, Albin Michel 1974, 2012

2、*Romain Rolland et Charles Baudouin Correspondance 1916–1944* présentée et annotée par A BRUM CESURA 2000

3、Chantal Meyer Plantureux, *Romain Rolland théâtre et engagement*, Presses universitaires de Caen 2012

4、Alain Corbellari, *Romain Rolland et la Suisse*, Etudes de Lettres 2012

5、Alain Corbellari, *Les Mots sous Les Notes* DROZ 2010 *Musicologie Littéraire et Poétique Musicale dans L'oeuvre de Romain Rolland*

6、Jean Pierre Valabrègue, *Romain Rolland et La Métaphore*: *La solitude de l'homme de vigie*, L'Harmattan 2011

7、*Textes rassembles et présentés* par Bernard Duchatelet, *Romain Rolland: Une Oeuvre de Paix* actes de colloque de Vézelay 2008 Sorbonne 2010

8、Jean Yves Brancy, *Romain Rolland un nouvel humanisme pour le xxe siècle*, Nouvelle Imprimerie Laballery Clamecy 2011

9、*Rolland Petit -Guilloux* 5 Conférences sur Romain Rolland Colloque Universitaire International 17 Juin 2011, 2012

二〇〇八年

1※、Romain Rolland, *Le Théâtre du Peuple*, Preface de Chantal Meyer Plantureux, Editions Complexe 2003

2※、Romain Rolland, *Jean Christophe*, Albin Michel 2007

3※、Romain Rolland, *Voyage à Moscou*, Introduction et notes de Bernard Duchatelet, Albin Michel 1992

4、Europe *Romain Rolland* no 942 2007

5、*Claudel-Rolland: Une Amitié perdue et retrouvée* Gallimard 2005

6、Stefan Zweig, *Romain Rolland*, Belfond 2000

7、Pierre Sipriot, *Guerre et paix autour de Romain Rolland* Le désastre de l'Europe 1914–1918, Bartillat 1997

8、David James Fisher, *Romain Rolland and the Politics of Intellectual Engagement*, Transaction 2004

9、Jean Richard Bloch, *Un théâtre engagé* Editions Complexe 2008

※はロマン・ロラン著 重版

寄贈図書

フランス　ロマン・ロラン協会

1、冊子 Cahiers de Brève no 30, 31, 32

2、Romain Rolland Au-dessus de la mêlée
Petite Bibliothèque Payot 2013

3、Romain Rolland et la musique Suivie de Mélusine Scenario inédit de Romain Rolland sous la direction de Bernard Duchatelet EUD 2013

4、Romain Rolland François Savary de Brève / Olivier Henri Bonnerot Jean Lacoste Association Romain Rolland 2013

フランス　クラムシー芸術・科学協会

1、冊子 2013

ベルナールデュシャトレ

1、L'Amitié Charles Péguy: Péguy et ses correspondants
Janvier mars 2013 No 141

読書会報告

例会、原則第四土曜日　午後二時～四時

於ロマン・ロラン研究所

二〇一三年、四月二七日、五月二五日、九月二八日、十月二六日、一二月七日。

二〇一四年、一月二五日、二月二二日、三月二二日、以上八回。三一七回、友の会から数えると四九二回終了。テクストは、『魅せられたる魂』――「予告するもの」「出産」－聖なる道　終了。

通年　参加総数一三〇人

短　信

＊大谷祥子さん　二〇一三年一一月　文化庁芸術祭参加作品新人賞受賞。

＊林　次郎さん　ユニテ四〇号拝受、濱田陽氏の講演、論考に深く打たれました。奥村一彦氏の感想文の思いに共感します。僕は表現する力はありませんがロランの最期の時

期に到達したものを、今の時に生かしたいという熱い思いを同感・共感しています。

＊加藤敬事さん　（前みすず書房編集長・社長）最近、『中華人民共和国史一五講』という本を翻訳し、ちくま学芸文庫から出しました。著者の王丹は天安門事件のリーダーということもあって、人権団体から、中国の人権問題についてお話をなどと言われ、戸惑ったりしています。

今日の朝日新聞の元・中国大使、丹羽宇一郎さんの話はよかったですね。「自らの行動原理は、学生時代に好きだったフランスの文豪ロマン・ロランの著作に学んだ」。

• 朝日新聞、二〇一四年一月四日、一一日、一八日の三回にわたり「逆風・満帆」として「尖閣に始まり、尖閣に終わる」「負の遺産に立ち向かう」「自分の心に忠実に生きる」が掲載された。

＊安木由美子さん　昨日「ユニテ」No.40を受け取りました。

濱田先生の講演は伺えなかったので、誌面で読める日を楽しみにしておりました。

若い方の視点でロランや賀川豊彦が語られること、そしてその思想を知られることの意義を思わずにはいられません。フランスでの「ヴェズレー日記」公刊に関するロラン復権の兆しの記事も日本でロランに引き寄せられ、集う私達を勇気づけてくれるようです。

自分に出来る事は何か…そう問いながら生きることがロランにつながる私たちの在り方なのではないかとも思います。

＊松田有美子さん　昨日の読書会にはたくさんの方々が参加され、一人で読んでいたときには思いもよらなかったいろいろな意見に感心したり、考えさせられたりの一日でした。帰りの電車の中では、「ユニテ」を興味深く読ませて頂きました。また、今夜じっくり続きを読もうと楽しみにしています。

† 訃報 †

田谷里美さん

二〇一三年五月末日、大脳内出血のため急逝。享年六一

朝起きてこられなかった死は儚い生を教えてくれる。母であり、妻であり、娘であることを誇りに誠実で真摯な生き方が共感を呼んだ。岩波文庫の『魅せられたる魂』に付箋をいっぱいつけて読書会に臨み、会終了時にはいつも一人でお茶碗を洗ってくださっていた姿が今も脳裏から離れない。感謝。合掌。

二〇一三年度　賛助会員、寄付者名簿

（アルファベット順・敬称略）*特別会員及同等寄付者

赤松　博司　安倍　道子　有馬通志子　安藤　知子
シッシュ・D・由紀子　権　英子　五島　清子
長谷川和宏　*長谷川治清　早川工務店（早川　友一）
濱田　陽　林　次郎　林　千恵子　日野二三代
*本郷美智子　福田　幸子　福田　由美　古家　和雄
石丸　啓子　池垣　勇　今井　香子　今西　良枝
*稲畑産業株式会社（稲畑　勝雄）　石川　楢一
*伊藤　朝子　井土　真杉　井上　幸子　岩坪嘉能子
神谷　郁代　狩野　直禎　加藤　澄子　加藤富美子
久保　久子　木下　洋美　清原　章夫　黒柳　大造
松田有美子　馬渕　岳大　峯村　泰光　宮本ヱイ子
森本　達雄　森内冨美子　*森内依理子　守田　省吾
村上　光彦　村上　葉　室谷　篤男　村田まち子
村山香代子　永易　秀夫　永田　和子　仲井　道子
中村　信子　中田　裕子　西村　秀美　西村七兵衛
*西成　勝好　西尾　順子　野村　庄吾　乗金　瑞穂
能田由紀子　岡部　素行　大川起示子　岡山　善政
奥村　一彦　奥村　令子　折田　忠温　大谷佳世子
大谷　史朗　大谷　祥子　坂井　昇　酒井　保子
坂谷　千歳　佐久間啓子　清水　憲一　佐々木雅子
志賀　錬三　下郡　将宏　下郡　由　所司　育代
園部　逸夫　鈴木　明子　田間　千晶　谷口　景子
谷口　良則　田代　輝子　田谷　里美　徳永　勲保
上原　栄子　植松　晃一　上西　妙子　馬木　紘子
梅田　菊代　梅原　ふさ　氏家　玲子　和田　義之
八木美佐子　安木由美子　山口　俊章　山本　和枝
山下　雅子　柳父　圀近　柳田　基

『ユニテ』編集を終えて

『ユニテ』41号を今年も無事送り出すことが出来ました。日本中を湧かせたソチ冬季オリンピックも終わり、ホッとしています。

今回は、冒頭に異色の講演を収録出来ました。ロマン・ロランが強く魅かれ、大きな影響を与えたインドの聖人「ヴィヴェーカーナンダ」、その生涯とメッセージについて語られたものです。語っていただいたのは、スワーミー・サティヤローカーナンダさん。今はラーマクリシュナ教団のリーダーであり、聖職にありますが、元は日本の出身の方。長い間教団で修行されました。学生時代、ロランの著書から啓発され、渡印を決心され、翻訳者の宮本正清先生から励ましを受けられたようです。今回の講演は吾々にとっても感銘深いものでした。『ユニテ』に載せることができたことを深く感謝いたします。

次に掲載したのは、ロマン・ロラン終焉の地「世界遺産ヴェズレー」についての興味深い紹介です。著者のグルシェフスキさんはロマネスク芸術の宝庫であるこの地の建築や彫刻に視点をおき、その魅力を語っていただきました。ロマン・ロランが愛したこの地への理解をさらに深めることが出来るでしょう。

なお、毎号連載していました村上光彦先生の玉稿を今回は載せることが出来ませんでした。真に残念ですがやむをえません。次号にご期待下さい。

他にも沢山の原稿をいただきありがとうございました。清原さんの読書会からの報告も貴重な資料になることと思います。誌上を借りて厚くお礼申し上げます。

なお、編集委員のお一人にみすず書房の守田省吾さんが前回から加わることになり、ご指導いただいております。小尾さんがお亡くなりになられて戸惑うばかりでしたが、専門家が入られ心強い味方になっていただいております。今後をご期待下さい。

（野村庄吾）

編集部

守田　省吾
野村　庄吾　　中田　裕子
西村七兵衛　　宮本ヱイ子

ユニテ　第四十一号

発行日　二〇一四年四月十日

発行者　一般財団法人
ロマン・ロラン研究所
理事長　西成勝好
京都市左京区銀閣寺前町三二
電話・FAX
（〇七五）七七一－三二八一
郵便番号　六〇六－八四〇七
郵便振替振込口座番号
〇一〇五〇－九－五九九九六

印刷所　（株）北斗プリント社

URL　http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/
E-mail　rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp

No 41 Avril 2014

U N I T É

Sommaire

La vie de Vivekananda et son message — Swami Satyalokananda

Vézelay, trésor de l'art roman et du patrimoine mondial — André Andjey Gruszewski

L'Ame Enchantée et la musique
Rapport des réunions mensuelles du groupe de lecture — Akio KIYOHARA

De Vézelay à kyoto
A travers une visite à Vézelay, ma rencontre avec l'Institut Romain Rolland de Kyôto — Toshiko ARIMA

A la mémoire de Mme Satomi Taya;
membre de l'Association des Amis de RR de Kyôto — Hiroko NAKATA

Compte-rendu des activité de l'Institut Romain Rolland

Activités et objectifs de l'Institut Romain Rolland

Annuaire 2013 des membres et donateurs

Postface

Publication: Institut Romain Rolland
32 Ginkakuji maé, Sakyo-ku, Kyoto 〒606-8407